（第3種郵便物認可）　神戸新

日本測器（神戸市中央区）

航海計器の伝統

注目!!

世紀を超えた「測る」専門商社

設立95年、5年後の上場目指す

「私たちの周りは測る行為にあふれている。計測はあらゆる産業に不可欠。そのニーズはどこにでもある」。日本測器（神戸市中央区）社長の明石仁成さん(66)が明快に語る。社名が示すように電子計測器や分析器の専門商社だ。圧力、温度、流量、液面、ガス検知…。電子分野でも波形表示や周波数分析、データ記録…。取引メーカーは実に3500社を超える。起業から113年、設立から95年。注目はミナト神戸が育んだ創業の物語だ。

□キャプテン野田

原点は野田啓太郎（1866～1935年）が1913（大正2）年に起こした野田測器調正所だ。野田は東京高等商船学校（現・東京海洋大）を卒業し、日本郵船に入社した。欧州航路の船長として活躍した後、神戸で航海計器の輸入に取り組んだ。社史「50年のあゆみ」（81年刊）によると野田は船長時代、「キャプテン野田」として鳴らした。その人脈を生かし、起業に際して英ヘンリーヒューズ社、ケルビン社など有力メーカーの日本総代理店として直輸入を行ったという。

野田測器は神戸の下山手通9丁目にあった。神戸船具商組合「五十五年の歩み」（2005年刊）には同社に入社し、航海計器の販売や修理に携わった人の寄稿「船用計器の思い出」がある。羅針儀、六分儀、晴雨計、クロノメーター、甲板時計などの概要が説明されている。キャプテン野田が輸入した戦前の名器類だろう。

野田は後継者に恵まれなかったことから、納入先の日本漁網船具（現・ニチモウ）常務で高等商船の後輩でもあった城山保次郎に支援を依頼。31年、同社の全額出資で日本測器が設立され、事業一切が継承された。

日本漁網船具も神戸にゆかりがある。神戸にあった高津商店の創業者高津英馬が、トロール漁業の将来性に着目、10年に下関市に設立した高津商店漁業部が源流だ。「ニチモウの最初の子会社が当社。今も縁は深い」と明石さんは言う。

□好機到来

2018年に12代目社長に就任した明石さんは、社内報「好機到来」を創刊するなど自由闊達な風土づくりに取り組んできた。デジタルトランスフォーメーション（DX）や人工知能（AI）時代の計測器に対応する「技術サービス部」を設立、地球温暖化対策に使える計測器の充実など、未来への備えも怠らない。

商社の最前線となる営業拠点は国内26カ所に置く。海外市場の伸びを見越して中国（11カ所）、ベトナム（2カ所）、タイ（1カ所）と強化してきた。目指すは、5年後の設立100周年に合わせた新規株式公開（IPO）だ。明石さんは言う。

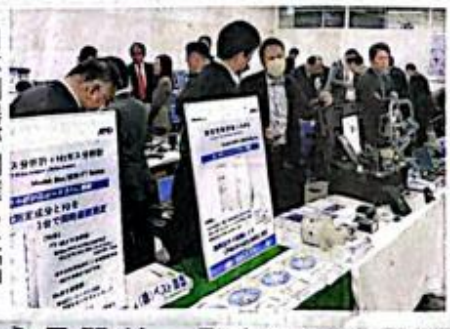
「座右の銘は人間万事塞翁が馬。幸福や不幸はその瞬間だけでは決められない。目の前の仕事の意味を考え、仕事のやり方を変えつつ次代を切り開いていきたい」

（特別編集委員・加藤正文）

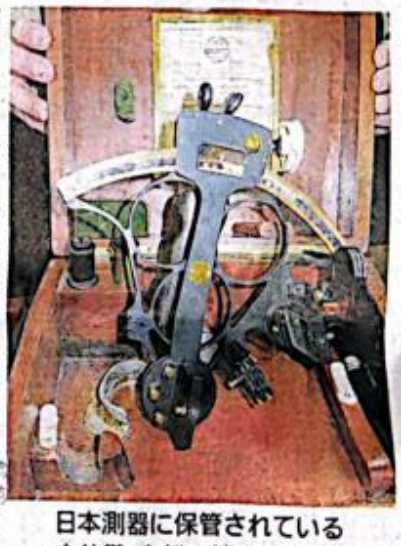
◇随時掲載します。

「モノを測るという行為は永遠です」と話す日本測器の明石仁成社長＝神戸市中央区磯辺通3

日本測器　計測器、計装システムの専門商社。1931（昭和6）年、前身の野田測器調正所の業務を継承し、日本漁網船具（現ニチモウ）の全額出資で設立。現在の出資比率は37%。年商175億円、経常利益5億4800万円（2025年3月期）。従業員230人。明石仁成社長は大阪電気通信大卒。1984年入社。2018年から社長。神戸市兵庫区出身。



日本測器が開催した「神戸先端計測展」。計測機器の最前線の製品が並ぶ＝2025年11月、神戸市中央区（同社提供）



日本測器に保管されている六分儀。自船の緯度・経度を計測する。1937年製造とある＝神戸市中央区磯辺通3